

「は」「心的素質の存在」記憶、素地の獲得と喪失の規則、丁寧の系列における心的体質の連続、また心的なものの下として総括される残りのものすべて」なのであった。そして

さらにヤスバースは、「精神的なものは了解の領域であり、身体的なものは因果的説明の領域である」と考へはもつともであるが誤りである」と述べ、「身体的なものであれ、精神的なものであれ、原則的に因果的説明によつて接近しえないような現実の事象は存在しないのであり、精神事象ですら因果的説明に従う」と主張しているのである。つまり、ヤスバースは、「了解問題を考慮しないで、明瞭に相関している思考作用の連続が将来何がある規則に従つて因果的に説明されると考へるのは不合理ではない」ということによつて、了解される精神の根底的基盤として、生物学的因果過程といふものが常に想定されうることをすでにここで暗に主張してしまつてゐるのである。

われわれはこのようなヤスバースの生物学的自然主義的立場が、了解不能な分裂病者という事態を解明するときの重大な問題点となるざるをえないことを、後の省察で明白にしてゆかねばならぬであろう。

(1) Karl Jaspers, Kausale und "verständliche" Zusammenhänge zwischen Schicksal und Psychose bei der Dementia praecox (Schizophrenie). in: Gesammelte Schriften zur Psychopathologie, Springer-Verlag, Berlin, Göttingen, Heidelberg, 1963, pp. 329-412.

(以下、KVと略す)『藤森英夫訳『精神病理学研究2』、みすず書房、一九七一年、二二〇-二三五八頁】

(2) cf. KV, p. 330 [邦訳二二一-二二二頁]

(3) cf. ibid. [邦訳二二一-二二二頁]

(4) KV, p. 331 [邦訳二二四頁]

(5) KV, p. 332 [邦訳同上]

(6) ibid. [邦訳二二五頁]

(7) PF, p. 314 [邦訳一九八頁]

(8) KV, p. 333 [邦訳二二六頁]

(9) KV, pp. 332-333 [邦訳二二五頁]

### 執筆者紹介

アマルティア・セン (Amartya Sen) 経済学者・倫理学者。ハーバード大学。著書『合理的な愚か者』(動草書房)『福祉の経済学』(岩波書店)。

松尾 正 (まつお・ただし) 精神医学。九州大学。著書『沈黙と自閉』(海鳴社)。

長瀬 隆 (ながせ・たかし) 作家。著書『ピロシマまでの長い道』(駿聲社)。翻訳書『ペレヴェルゼフ『ドストエフスキイの創造』(みすず書房)。

上村 忠男 (うえむら・ただお) 思想史・學問論。東京外国语大学。著書『ヴィコの懷疑』(みすず書房)。翻訳書『ヴィコ『学問の方法』(岩波文庫)。

大澤 真幸 (おおさわ・まさき) 社会学。千葉大学。著書『行為の代数学』(青土社)『身体の比較社会学』(動草書房)。

西井 一夫 (にしい・かずお) 毎日新聞出版局企画室委員。著書『写真というメディア』(冬樹社)『昭和二十年東京地図』(筑摩書房)ほか。

## ДВОЙНИК は「二重人」か、「分身」か?

——ペレヴェルゼフ『ドストエフスキイの創造』の今日的意義——

長瀬 隆

—— ДВОЙНИК は「二重人」か、「分身」か? ——  
— ペレヴェルゼフ『ドストエフスキイの創造』の今日的意義 ——  
私はそのすべてに通じているわけではないが、その代表としてペフチンの『ドストエフスキイ論』(副題に「創作方法の諸問題」)(新谷敬三郎訳)をとりあげると、原著者は「分身」と読んでいることが知られる。またロシヤ文學者および非ロシヤ文學者(ロシヤ語を読まない人)をとわず、この作品について書いたり触れたりする人は、かつてはその大部分が「二重人格」派であった。しかし近年ではほとんどが「分身」派である。一つの訳語はそのいすれが正しく、また適切なのであろうか?

ここで指摘されねばならないのは、二巻全集が刊行された当時、ロシヤ文學界で話題になっていた一冊のドストエフスキイ論があつたことである。ペレヴェルゼフ(一八八一-一九六八)の前掲書がそれである。一九一一年に刊行されたこの著書は、つづく一九

一四年刊の『ゴーリキの創造』とともに、一九一七年の革命後に廣く讀まれ、ほとんど古典的な評価を受け、一九二八年にはともに第四版が出たものであった。早大圖書館には、学科の創始者である片上伸がモスクワ遊學からもち帰つたものと思われる、一九一二年の第二版が一九二六年の日付で所蔵されている。しかし片上は讀むことなく逝つたはずであり、本国での評価の高まりに刺激されて、ドストエフスキイ熱が高揚したこの時期に、その弟子たちである同学科出身者（だけではないが）のあいだで争つて読まれ、強い関心の対象となつたのである。

この名著の全訳の翻訳刊行の異常なまでの遅延の原因については、私は翻訳の解説で述べてある。強調されねばならないのは、ペレヴェルゼフは一九一〇年代に指導的なマルクス主義文學者・批評家として活動したが、一九三〇年に激しい「批判」にさらされ、モスクワ大学教授の地位を失ない、かの一九三七年の大規模彈圧のさいにメンシキヴィキ「ソ連文學の敵」と断罪され、その名は消え、以後、ロシヤにおいてはもちろん、日本においても忘れられた存在と化したことである。戦前の日本におけるドストエフスキイ熱の高揚は、それと前後した左翼運動の崩壊と表裏の関係にあるが、まさにこの時期に、ソ連ではすでに「失脚」していた人のマルクス主義的著作が注目されたのであった。

この著作の今日にいたる最大の特色は、ДВОЙНИКを「二重人」と讀んでいることにある。

三章全集ときひすを擴するようにしてこの年発刊された季刊文學研究誌『漫遊古鏡』は、第一号をドストエフスキイ研究特輯にあてているが、そこで木寺黎一（松尾隆）がその『ドストエフスキイ文獻考』の初稿の中でペレヴェルゼフの名と著作名を擧げ、除村吉太郎が『ゴーリキの創造』の紹介をしている。題目すべきは、片上後の實質的学科主任であった助教授の岡沢秀虎であって、彼は、『ドストエフスキイの創造』のなかのラスコーリニコフにかかるする章を全訳し、あたかも自分の論文であるかのように、己の名で發表している。彼はさらに、同じ年に、雑誌『書物』にイヴァン・カラマーゾフの章を翻訳發表しているが、前者の場合には末尾に（専らペレヴェルゼフによる）と括弧して記したにもかかわらず、それではその専し書きをも省いてしまつてある。また以上の外にも昇騰夢が、別途に、ロシヤ批評におけるドストエフスキイを論じた章を翻訳している。以上のようなうちで、ДВОЙНИKを訳す必要のあつた岡沢が「ラスコーリニコフは典型的に二重人格者である」と訳している。八住の訳語はこうした影響もしくは助言があつてのものであつたろう。しかしながら ДВОЙНИKは普通名詞であり、かつ人格の意味は含まれていないのだから、「二重人格」と抽象名詞に訳すのは、適切ではない。また岡沢がもしも全訳を試みたならば、著者がドストエフスキイの人物たちの一重性および二極分裂を述べつつ、それを性格を含めた全面的なものとしていることを知つたはずであり、他の訳語を探求しな

ロシヤ語に ДВОИТЬ（一分する）という動詞があり、それから派生した ДВОЙНОЙ（一分の、一重の）という形容詞がある。ДВОЙНИКはこれから派生しており、久しく、普通には「分身」もしくは「分身」的に使用されているが、それは転移した意味が主流となつたものであり、分身が誕生するためには、まず本体が一分された状態がなければならないことから明らかのように、原意は「一重体（人）」であり、その意味は今日まだ失われてはいない。ミシシル・フーコー（一九一六—一九八四）の『言葉と物』（一九六六）の邦訳で、訳者たちは ДВОЙНИК と語形的に対応する DOUBLET を「重体、ДВОЙНОЙ（形容詞であり、名詞の働きは有しない）に対応する DOUBLE（形容詞であり、かつ名詞である）に分身の訳語を当てている。かりにフーコーの著作をロシヤ語に翻訳するすれば、フランス語の両語をロシヤ語風に音訳するのでなければ、DOUBLET も DOUBLE もどちらも ДВОЙНИК に訳さざるをえないのである。このことからも ДВОЙНИK は「重人（体）」と分身の双方の意味をもつと結論することはできる。したがつて、《ДВОЙНИK》の表題の訳語の決定は、当の作品の内容をどう読みとるかにかかっているのだ。そしてこの際、重要なのは、ドストエフスキイ自身が主觀的にはこの語によって何を念頭においていたかということよりも、作品の客觀的内容であり、それは一重構造の人間、一極分裂の人間、すなわち「二重人」が描かれているということなのである。

ければならなかつたはずである。次の拙訳は「二重人」としたために、訳しえたものである。「彼らは世界についての思索においてのみ二重人であるのではない。社会問題にたいしても道徳問題にたいしても、彼らの思想は一つに分裂しており、彼らは社会について、人間個人について思索しつゝ、二重人に止まつてゐるのだ。すなわち、彼らは思想において二重人であるのみならず、その感情においても、その本能的趣向においても同様であり、最後に、彼らは心理的のみならず、社会における物質的に二重な地位のために、こう言つてよければ、肉体的にも二重人なのである。」しかしながら、全十二章の作品《ДВОЙНИK》においては、表題以外にも、本文にこの言葉が登場する。五章の末尾の行においてであり、それ一回きりであるが、これは「二重人」と訳すことはできない。八住はそれをも「二重人格」と訳して、破綻をきたした。米川はその轍は踏むまいとし、双方を「分身」とした。しかし小沼は、この米川に逆らうようにして、訳語の統一は不可能と考え、それを歎念し、「幻像」と訳した。小沼の苦心の訳と、その試みを知りつつ、細部を除いては、米川をそつくりそのまま継承した江川卓の訳を示そう。

「その深夜の友人こそはほんならぬ彼自身だったのだ。」ゴリヤードキン氏その人、一言にして言えば、あらゆる点で鏡に映つたようないわゆる彼の幻像だったるのである……。（小沼文彦）

「夜の友人は、ほかでもない彼自身であった、——ゴリヤートキン氏その人であった、もう一人の、しかし彼自身とまったく同じゴリヤートキン氏であった、——一口で言えば、あらゆる点で彼そつくりの、いわゆる分身だったのである……。」(江川卓)

私は、米川はペレヴェルゼフを読むことなく、翻訳したのではなかろうかと思う。しかし、遅くとも戦後には、小沼の訳語に刺激されてかどうかは知るよしもないが、読んでいる。五〇年代後半のいわゆる決定版全集では、彼は、その名を数度にわたって挙げ、その説に多大に依拠した解説を書いているのである。ДВОЙНИК は岡沢同様に「二重人格者」と読んでおり、繰り返し記している。当然、それが己の「分身」の訳語と対立することは、知っていたわけである。しかし彼は、それについては口を閉ざし、「分身」を変更せず、そのまま残したのであった。

ペレヴェルゼフは、ドストエフスキイの主要な登場人物を都市の小市民と規定し、その社会的存在形態が二重な不安定なものであり、その結果として精神が我意と温順の相対という形態をとっていることを指摘し、ДВОЙНИК の主要な意味つまりは表の意味を「二重人」と読んだのである。またこの二重人のうちでない反する二つの傾向の一方が他方に勝利し、片方だけになつた形態として、ドストエフスキイ自身が使用した言葉を用いて、「我意の人」と「温順な人」というカテゴリーを提出した。その論旨

をも、米川は、明確さに難があるが、解説において援用し、かつ叙述している。しかし「二重人格者」以上の訳語を発見できなかつたために、「分身」のほうを良しとしたのだと思われる。彼におけるペレヴェルゼフの受容は、結果としては、その否定となっている。

「二重人格」を固執した理由については、小沼は「心理学的要素に重点をおくか、相似関係に重点を置くかによって訳語が異なってくるわけであるが、心理学的意味に重点をおき、あえて「二重人格」のままにしておいた」(岩波文庫、一九八一年版の解説)と述べている。これは、一九七八年に江川の『分身』が出ているのだから、それを意識しての言葉とも見ることができる。その江川は、書かれたものにおいては、米川もそうであったように、「二重人格」を非とする言説をしていない。しかし ДВОЙНИК については、「表の意味は分身、裏の意味はそつくりさん」と記しており、「二重人格」は問題外といった態度である。私はこれは間違いであると思う。「分身」と「そつくりさん」とては、表も裏もない。一つは互いに同義語である。ДВОЙНИК は、二重人と分身という互いに対立的な二つの意味を有し、それらを表と裏の意味とする言葉なのである。

私は、ドストエフスキイがいかなる意味において ДВОЙНИK を使用したかということでは、作中ではこれを ПОДОБНЫЙ (相似の) と言いかえており、主観的には、より多く「分身」だ

「たゞ感づうのである。(そのために懲罰をされたことは、この構の附ひで述べよう) ペレヴェルゼフは、しかし、処女作『貧しき人々』のゴリヤートキンをすでに ДВОЙНИК (二重人) と見なしており、ゴリヤートキンを同質なものとの変形と見なし、「第二作はその名も《ДВОЙНИК》という典型的なものである」と言いきつている。表題が両義を有するために、そしてそれらが対立的であるために、そのいずれを主要なものと見るかという点では、ロシヤ人の研究者のあいだでも相違があり、それが論文・評論の相違となって現れている。そのような言葉を一語に翻訳しなければならないのだから、訳者の苦労は並大抵のものではない。しかしながら、この言葉の理解を誤ると、ドストエフスキイの文学は根本的に誤って理解されることになる。私は、世にドストエフスキイ問題というものがあるとすれば、それは、かかつて ДВОЙНИК という一語の問題を要約される、と考える。そして、つけ加えれば、ここには現代哲学の最先端の問題にかかわるものがあるものである。

まず小沼の「幻像」という訳語であるが、私はこれを採らない。ペレヴェルゼフは「彼らは……こう言つてよければ、肉体的に「二重人である」と先の引用で述べているが、これに該当するのはゴリヤートキンであり、かつ彼ひとりである。そして作品はまさにそのように、別個の存在として第一のゴリヤートキンが登場しており、これはやはり「分身」のほうが無難なのである。このこ

とは、ドストエフスキイがこの後に ДВОЙНИК を使用した唯一の例である、『未成年』の該当箇所を見ると、確信させられるのだ。そこはまた、ペレヴェルゼフが論文のうちに引用している箇所もある。ДВОЙНИK が頻出し、そのすべてが「二重人」である論文中で、著者は《ДВОЙНИK》の五章と同じ使われかたをした、『未成年』のうちの文章を、いささかの困惑もなく、まさに己の主張に適つたものとして引用しているのである。

それもまた当然であろう。それを一つの外国语の単語に翻訳しようとするから、困惑するのであって、ロシヤ人にとては両義を有する一つの言葉であるにすぎないのである。しかし翻訳者は翻訳しなければならず、米川はここでも「分身」と訳している。「幻像」とすると、《ДВОЙНИK》の場合もそのだけれども、「二重人」よりもシロフの主観を表現する訳語としては、この後に生ずる彼の精神的闘争を説明するのに弱いのである。私は表題には「二重人」を主張するのであり、本文中の ДВОЙНИK についても、「分身」をもじとする。ただし私は、ドストエフスキイを論する場合には、「分身」はよくないだけではなく、有害であると考える。「分身」にもつては、ドストエフスキイの半面しか論することができないのである。『未成年』のその箇所の拙訳を掲げる。

「実はね——たとえばペレヴェルゼフは言う——自分がほんとうに一いつに割れてゆくような気がするのですよ。まつたく精神的に分裂してゆくんです。わたしはこれが怖くてたまらない。じぶんのそばにじぶんのそつくりさん（ДВОЙНИК）が立っているような具合なんだ。」

「二重人（体）と分身を意味する言葉が、フランス語におけるように明瞭に分離しているのであるならば（そうではないかもしれないが）、苦労はないのである。言葉の両義性のために翻訳者は苦しむのであり、訳語に相違が生じ、このためにその文学の評価と鑑賞にたんなる相違ではすまないものが生ずるのだ。しかしこれは、ロシヤ語を母国語とはしない者のあいだだけでの現象ではない。ロシヤ人のあいだでも、それはある。たとえばペレヴェルゼフの論文は「二重人」によらなければ翻訳できないが、バフチンは「分身」によらなければ不可能であり、この相違の根底には両者の世界観・人生観の相違が横たわっている。一九六三年の七〇歳ちかい老人のバフチンは言う、「世界にはいまだかつて何ひとつ決定的なことは起こっていない。世界についての、また世界の最後の言葉はまだ語られていないし、世界は開かれたままであり、いつさいはこれからであり、永遠にこれからであろう」と。対するに一九一一年には三〇歳であったペレヴェルゼフは、「野

に生きている人はいるのか？」という作家その人の間いかげのうちに、一重人の社会問題の解決を求める痛切な声を聞きとり、それにおいて社会主義革命をもつて答えていた。ペレヴェルゼフはブレハイノフに学んだマルクス主義者であった。しかし『ドストエフスキイの創造』を言葉と文体の分析から始めているように、師を越えていた。またそれゆえにスターリズムとは激突したのであり、一九三四年のソ連作家同盟の成立は、事前に彼を排除することなしには、不可能だったので。その思想は、「構造主義者」フーコー（彼は唯物論者である）と時空をこえた接点を有するが、私には思われる。『言葉と物』から長い引用を取ってしよう。

「人間は、知にとつて客体でもあるし、認識する主体でもある、その両義的立場をもつて現れる。」「有限性の分析論において、人間とは奇妙な経験的・先驗的二重体（DOUBLET）である。それこそ、そのなかであらゆる認識を可能にするものの認識がおこなわれる、こうした存在だからだ。」「思考されぬものは、人間のなかに、縮まつた自然として、あるいはそこに層をなす歴史として、宿るのではない。それこそ、人間との関係においては、『他者』なのである。人間から生れたのでも人間のなかに生れたのでもなく、ときに、同時に、同一な新しさ、どうにもならぬ二重的存在として生れた、兄弟で双子の『他者』である。人間の自然のうちの感知れぬ領域として、あるいは、

命の體のせぐに餌をかけられた蟲として、いややれば解剖されるこの崎異な眞界は、それとはまつたくべつの機械にもとづいて人間につながっているのだ。つまりそれは、人間にたいして外部のものであると同時に次々へからざるものであり、いくぶんかは、知のなかに姿をあらわす人間のもつ影であり、いくぶんかは、そこから出発して人間を認識することが可能となる目的的なしみなのである。ともかくも、思考されぬものは、十九世紀以来、人間にたいして體の忠実な伴侶として役だってきた。要するに、それは執拗な分身（DOUBLE）であるにすぎなかつたら、自律的な様態にもとづいて、それ自身のために反省されることなどけつしてなかつた。人間の『他者』であり影であるそれは、人間から相補的形態とかさまの名を受けとつていたのである。つまり、ヘーメルの現象学では『対自』にたいする『眞自』であり、ショーラベンハウエルにとつては、『無意識なもの』であり、マルクスにとつては、疎外された人間であり、フッサールの諸分析では、潜在的なもの、非顯在的なもの、沈黙させられたもの、非充実態であった。ともかく、それこそ、人間が眞実であるところのものの濁つた投影として、反省的知に呈示されるが、人間がそこから出発しておのれ自身を結集し、おのれの眞実までも想起しなければならぬ、あらかじめ決められた基底の役割を演じる、汲みつくしえぬ裏面にはかならない。だからこの分身（DOUBLE）は、近くにあ

うでも無縫のものであつて、思考の役割、その固有のイニシアチフは、それを思考自身にできるだけ近づけることである（渡辺一民・佐々木明訳）。  
フーコーの説くところに依拠するならば、ДВОЙНИКに訳語の統一を目指すことは無意味であるだけではなく、誤りだということになる。むしろこのロシヤ語の両義性を読者に知らしめるべく、表題には「二重人」を、作品中のそれには「分身」もしくは「そつくりさん」を当てるのがよい。しかしながらそれによつても、『ДВОЙНИК』は不透明な作品として残るであろう。なぜならば、ドストエフスキイは両義性を心得ていて、それと戯れ、かつそれを利用しているようふしがあるからである。不透明はそこからも生じており、この作品の意図が了解されるのは、ペレヴェルゼフがこの上もなく明瞭簡潔に指摘するように、その全作家活動の最後の最後にイヴァン・カラマーゾフがおり、彼が癡狂の前に見る悪魔が、第一のゴリヤートキンに託されたものの眞の像を明らかにしているからである。（これも彼がはじめて指摘したことだ。）この民間伝承に発する、多分に呪術的な言葉は、分身と訳された場合にも、それ自体が二重人であるような「分身」であつて、それが二重人から生まれてきたように、母体の二重人がゴリヤートキン癡狂によって終わつたように解体消滅すれば、ただちに二重人に変身し、そこからまたもや分身が現れ

るといった運動を無限に繰り返す、面白くもあり奇怪でもある存在なのである。つぎの文章がその証左である。

「彼の足が舗道の花崗岩をこつんと踏みつける度ごとに、あたかも地の底から湧いて出るよう、彼とまつたく瓜二つのゴリヤートキン氏、腐敗しきったいまわしい心をもつたゴリヤートキン氏が一人ずつ飛び出してくるのだった。そしてこのまつたく瓜二つのそっくりさんたち(ПОДОБНЫЙ。ДВОЙНИК)に非ずは、飛び出してくるが早いか、次ぎから次ぎへと長い行列をつくって走りだし、まるで鶯の行列のように長くつながって、ゴリヤートキン氏のあとからちよこまかわよこまかとついて来るので、もはやゴリヤートキン氏は、このそっくりさんたちから逃げようにもその場所がなく、真に哀れをきわめたほんもののゴリヤートキン氏は、恐怖のあまり息も止りそうなほどであった。——そしてついには、数知れぬ何千何百万のそっくりさんが生みだされ、あげくは首都全体がそっくりさんで溢れかえり、さすがに警察官も、このような秩序紊乱を見るに見かね、片つ端からこれらのそっくりさんどもの憲首をつかんで、近所の交番に拘留せざるをえなくなる……」。  
私は一九三一年に樺太に生まれ、戦後ソ連占領下で一年半暮らした日本人の言葉で書かれた物語である。

筆者では有効でやうやく書き下さる書籍を感じたのであり、それを起した事でのことだった。だがドストエフスキイの会の研究會で「唯物史觀は成立しない」という批判をうけ、また塙谷高からは「一九一一年の著作としては優れたものだ。しかしバフチンが出ており、記者としては(君は)損をしたな」と評された。ペレヴェルゼフははたして時代遅れであろうか。

バフチンの著作は初版が一九一八年(新谷の翻訳は一九六三年の増補第二版)であり、ペレヴェルゼフの金盛期の時代のものであり、その影響下に書かれている。たとえば、ドストエフスキイの作品の個々の人物の思想に足をとられることがなく、その全体を見ようとする姿勢は、ペレヴェルゼフが最初に打ち出したものであり、それは継承されている。ところが革命後西欧に亡命したメジコフスキイやシエストフのみならず、無味乾燥な社会主義アリズムの理論家であるエルミトロフ(一九三〇年のペレヴェルゼフ攻撃の実行者)犯罪者まで含め、ほとんどすべてのドストエフスキイ論の執筆者の名が挙げられているにもかかわらず、その著書にはペレヴェルゼフの名は欠落しているのである。これは異様でさえある。ペレヴェルゼフその人は一九三七年の大弾圧により、完全に執筆の場を失い、一九五七年に「名誉回復」されるまで消息が不明、一九六七年に死去している。しかも『ドストエフスキイの創造』が、他の論文とともに一冊にまとめられて再刊されたのは、バフチンよりも九年も遅く、やつと一九七六年になつてか

して引揚げ、一九五一年に早大醫文に進学、米川・岡沢・除村らの先生に習つた者である。本業後、五七年と五九年に原水禁運動・平和運動にかかわつてソ連・中欧・中国に行き、六一年に商社にはいり、長くソ連貿易にかかわつて生活してきた。八四年に『樺太は遠く孤島な』八九年に『ロシアまでの長い道』という自作を、また後者と同じ年に、述べてきたペレヴェルゼフ『ドストエフスキイの創造』を刊行した。そして今年、一九九一年の四月から五月にかけて広島大原爆医学研究所の教授らとともにペルリン、バルト三国、チャルノブイリ(シンスクヒエフ)、およびモスクワを旅してきた。また帰国後も、原医研が招待した医師や子供たちにかかわつて仕事しつつ、八月のソ連「政變」なるものに接することになった。レニングラードはサンクト・ペテルブルグとピヨートル時代の名に戻ることとなり、それはロシヤがその時代にさかのぼつて自己の歴史を再検討する、内省の時代に入つたことを意味する。今や、マルクス主義が入つてからロシヤはおかしくなつたとか、罪はマルクスその人にあつたとする声が聞かれる時代である。私はペレヴェルゼフの翻訳の解説で、それを、優れてマルクス主義的な論文と称賛し、それが唯物史觀(史的唯物論と記したが)に立つことを強調した。私自身は、ふたつの自作に明らかなのであるが、すでに久しく共産党離れ、マルクス主義離れを起こしていたのである。しかしながら、ロシヤ革命に先立つこと五年の『ドストエフスキイの創造』には、一九一七

年である。つまりは、その中にはペレヴェルゼフのものはまだ出せる状況にはなかつたのであり、その名が省かれたのだと考へることができる。実際、彼はバフチンなどよりも、権力にとってははるかに危険な存在であつたのだ。ペレヴェルゼフには、一九二一年のドストエフスキイ生誕百年祭にあたつて、共産主義アカデミイで行つた「ドストエフスキイと革命」という記念講演(拙訳書には収録)がある。それには、革命に参加し、それを現実に体験することによって得られた、新たな視点が提示されている。革命と『惡靈』を論じつつ、彼は「革命的一揆には、憤慨とさせる力もあれば薄氣味悪い無力感もある。すなわち魂をとらえる自由のうちには力が、革命的專制が避けがたいことのうちには無力感がある。革命のなかにはなにやら悪魔的に狡猾なもの、悪魔的に悪質いものがあるのだ。革命の恐怖は、その道德否定、流血性、殘忍性にあるのではない。それがもたらす金塊が悪魔の財宝であつて、その金塊を獲得するためにこそ残酷の限りを尽くしたものかわらず、やがてそれが陶器の破片と形骸化することのうちにあるのだ」と言いきつたのである。今日ではまことによく理解されるこの言葉(論文)こそは、しかしながら、後の集中攻撃の原因となつたのであり、彼は弾圧されたのである。

その後に到來したのは、長期にわたつて続いたドストエフスキイの発禁の時代であった。権力にとって危険であったのは、『惡

靈』のペレヴェルゼフ的理解だったのであり、一九七六年の論文集の再刊のさいにも、この『ドストエフスキイと革命』は収録されなかつたのである。それは、ソ連社会成立期のもつとも隱微にして、かつ先鋭な道徳的・政治的问题に触れるものだったのである。

こうして見ると、一九六〇年代になってロシヤで刊行されるようになり、わが国に翻訳紹介されてきた一連のドストエフスキイ論に、ペレヴェルゼフの名が欠落している理由は明らかであろう。著者たちは火中の栗を拾おうとはしなかつたのであり、したがつて、それらの著書は、何を語っているかだけではなく、何が語られていないかといふ観点からも読まれる必要がある。私は見によれば、ペレヴェルゼフが避けられ、そして語られていないのだ。沙黓は一端に偏着する。ひとつはДВОЙНИКの両義のいずれを探るかということであり、いまひとつは『惡靈』と社会主義の問題である。一つは一体のものであるが、前者に限定して言えば、それは哲学における唯物論と概念論の対立に相応する問題である。

ペレヴェルゼフはマルクス主義者として出発した。しかし一〇年代に、一九三〇年代の作家ゴリヤートキンがДВОЙНИK的人物を描いていることを発掘・解明した論文『ドストエフスキイの先行者』を書いており、そのなかでは、『ドストエフスキイの創造』に顯著たつたプロレタリアへの信仰を脱している。また弾

圧を受けた後には、今日明らかになっている限りでは、古代ロシヤ文学の研究に向かっている。彼はスターイン時代の強いられた沙黓をじつに長く生き、おそらくはバフチンらの著作をも読んで、一九六八年に逝つた。己の青春の著作である『ドストエフスキイの創造』についても、何が欠落しているかは知つていてあろうし、さらなる論の展開があつたと思われる。しかしそうしたもののが一切なくとも、そのДВОЙНИKの把握は、かつてロシヤで広く認められたように、不滅であり、古典的価値をもつものであると私は考える。

バフチンら「形式主義者」たちの場合には、この点でペレヴェルゼフよりも後退しているのである。それは「スヴィドリガイロフはラスコーリニコフの部分的分身である」といったもの言いに現れている。いつたい私たちは、こうした言葉から何か明瞭な認識を得ることができもうか。ここにはフーコーに見られる言葉の厳密性が欠けている。これは何も語っていないか、もしくは隠語によるもの言いに属するのである。遺憾ながら、これに相似のもの言いはわが国の研究者にも散見されている。正しくは、ラスコーリニコフは我意と温順の相克を生きる二重人であり、温順なソトニヤ・マルメラードヴァとその温順の侧面において接点をもつように、スヴィドリガイロフとは我意の侧面において接点をもつ、と言わなければならぬのである。

ペレヴェルゼフのДВОЙНИKの把握がまことに貴重なのは、

それが第一作の書簡でもうだけではなく、ナウマゴリヤートキンを指示しているだけではなく、ドストエフスキイのほんと全部の作品の中心的人物の別名であるからである。彼が生涯を通じて描きつけたのはこのタイプであり、「それを失いたいものは一作もない」のであり、世界は彼にとって「一個の多頭な二重人」に見えただけではなく、「彼自身が二重人であった」からなのである。

バフチンの著書は、ドストエフスキイの小説を『ボリオニ小説』とする論によって人々を魅了している。そうした観点はペレヴェルゼフにはないものであり、それはこの著者の獨創に属している。しかしながらバフチンは、どうしてドストエフスキイがそのような小説形式に到達したのか、それを生みだしたのかということの説明は与えていない。まことに「形式主義者」らしく、形式すなわち結果については多弁だが、内容への言及は乏しいのである。もつとも、それは、彼が、内容についてはペレヴェルゼフによつて完全に解明されているから、それに譲ろうと考えたため、と見なすこともできる。ただし、ДВОЙНИKを「二重人」と読むと、形式の探求が窮屈になると思ったのだろうか、ペレヴェルゼフのその把握は、説明ぬきで、退けている。しかし、『ボリオニ小説』はこの立場に立つた場合にこそ、よく説明できるのである。

二重人の完全全面的な描出を目指す過程で、ドストエフスキイ

は我意と温順の二つのカテゴリーを創出した。また、貴族地主の衣装を着ただけの、内実においては小市民である人物、人魚やスマシンクスのような空想の所産である人物、つまり「仮装人物」を創造した。そして私の見るようによると、このタイプの人物は、作中に語り手である「私」が登場するごとに登場しており、前者がいる作品には後者がかならずおり、またその逆もしかりなのである。両者の相違は、一方が書く人であるのにたいし、他方が書くことの（決して）ない人であることがある。この種の作品の最初に立つのが『ДВОЙНИK』であり、また最初の「仮装人物」が第一のゴリヤートキンである。これは、語り手の「私」の分身ではあるが、主人公ゴリヤートキンの分身とはいがたい。それをなんとかしてゴリヤートキンの分身であるかのように書こうとしたために、作品がまことに不透明なものとなつたのである。（つまり、分身は分身として書けていない。この意味においても、表題に「分身」を採用するわけにはゆかない）この失敗に学んで、その後のドストエフスキイは同じ誤ちを繰り返していない。小市民の衣装のままの「仮装人物」（矛盾した表現であるが）は一度と登場していない。すべて貴族地主の衣装をまとつて登場することになつてゐる。

ドストエフスキイは「書くことは何か」を意識して書いた最初のロシヤ作家でもあつた。ゴリヤートキンの最終的発展形態は、イギアン・カラマゾフである。しかしながら、第二のゴリヤート

キンも、その最終的な発展形態をもつたのである。私はそれをス  
タヴローギンに認めるのである。これこそは貴族地主の衣装をま  
とつた小市民であり、「仮装人物」の完成された像であり、「書か  
ない人間」のすべての特徴というよりは、その究極の姿すなわ  
ち、たどえすべてが備わっていても、何が欠けていると、人は書  
かないし、また書けなくなるかを明証する人物として、描かれて  
いる。「仮装人物」のすべては、作者によつて作中に設定された  
芸術的装置であつて、存在しつつ非在に覆われている。かつその  
大部分が、その我意の側面を描くためには温順の側面を描かねば  
ならず、またその逆である一重人に屬しているのである。つまり  
ここからカーニバル的な作品構成の必要が生じたのである。原因  
があつて結果が生じたのであつて、その逆ではない。

ロシヤの「形式主義者」たちが ДВОЙНИК を「分身」とい  
うえているからといって、その訳語をよしとすることはできない  
ДВОЙНИК から一重人の表の意味を抹消し、分身の裏面での  
み理解し、ただその訳語だけでよしとするは、研究と鑑賞はドス  
トエフスキイの作品の内容の解明からははずれ、後退し、読者の  
関心を枝葉に誘うこととなる。江川卓のドストエフスキイにかん  
する一連の「謎しき」の仕事は、ロシヤ語にかかわつては私も教  
えられるものがあつた。しかしながらラスコリニコフゼンソニ  
ヤ・マルメラードヴァアの性關係の有無についての論議などは邪道  
だと思つてゐる。江川が有りとした同じ根拠にもどづいて、無

# ヴィーユと新時代の形而上学 1

り、それがそのままの原形であるが、ついで新出土書は同様に分類され、三つの新出土書の場面としての問題点が追加で論じられる。その示すところによれば、新出土書は、さうして種類別に分類される新出土書の中でも、必ずしも中華書局の翻訳を以てするものである。翻訳がもたらす二つの特徴がある。一つは、翻訳を以てするものと、翻訳を以てしないものとの間隔を保つてゐる点である。<sup>(1)</sup> 二つは、翻訳を以てするものの中でも、新出土書と新出土書である間に翻訳を以てするものとしないものとの間隔を保つてゐる点である。つまり、新出土書では、新出土書 1 で翻訳に入るものと翻訳を以てしないものと、<sup>(2)</sup> ヴィコが一七三〇年に『新しい学』の改訂版を出すにいたつた経緯については、すでに簡略ながら見たところである。しかしながら、ぶんにも出版が急を要したために執筆の期間が限られていたほか、当時かれは折悪しくもカタル性の流行病に感染していたことなどもあって、そこにはなお、文章の訂正と改善、そして追加を必要とする箇所が少なからず残る結果となつたものようである。実際にもヴィコは、原稿が印刷に付されている時点で早くもそうした訂正・改善・追加の第一回目の作業にとりかかっている。そして、著作が公刊された直後の翌三一年一月には、知人のスカラーア公、ドン・フランチエスコ・スピネリから三か所の

かつたといふ論を立てることは不可能ではないし、当時におけるロシヤ正教と結びついた検閲の存在があつたとはいえ、作者が明示するように書いてはいないことを、あれこれと憶測しても始まらぬと思うのである。重要なことは書かれてあることについて、明確な概念を与えることであろう。

とはいき江川の試みは面白いといえば面白いので、追随者もまた現れている。私は過日、『ドストエフスキイ』の会の集まりで、『悪靈』についての報告者が、第三部のスタヴローギンヒリザギュータ・トカラシが過ごした一夜について触れ、激しく性行為が行われた一夜であったと、そのおよその回数まで挙げて述べるのを聞き、驚いた。私はひさしくその夜のスタヴローギンはインボテンツであったと思つてきて、それを疑つたことはなかつたのである。かくて、報告者と私のあいだで、明示するようには何も書かれていないので、その一夜について、ラチもない応酬がおこなわれた。ラチもないと言うのは、そのとき私が『ドストエフスキイ』の創造の記者であることを忘れていて、ペレザギュルゼフが、三つのタイプの人物群の恋愛および異性関係について、それそれに草をもうけて、どうの昔に遇不足なく述べきているということを、そのさいに言いそびれたからである。それを反省するからである。